

楽器収集と展示の先駆者：水野佐平の研究

守重 信郎

日本大学大学院総合社会情報研究科

Research into Sahei Mizuno who pioneered in the collection and display of musical instruments

MORISHIGE Noburo

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In this study, the author reviews the life of Sahei Mizuno (1891-1972), who collected and displayed musical instruments to the public for the first time in Japan, and evaluates his achievements. Mizuno collected musical instruments in Japan and China, etc. for a lifetime, while making a living by producing koto (Japanese harp), and displayed them to the public, in Itami-shi, Hyogo Prefecture, where he had the atelier. According to his unpublished “autobiography,” he displayed for social education and the distribution of Japanese music. This is a prototype of the first museum of musical instruments in Japan. In addition, Mizuno donated these musical instruments to inside and outside Japan. He could introduce the Japanese music culture to Europe, by donating koto to the museums in France, Germany, and Austria. In addition, the donation of his collection to Osaka College of Music and Musashino Academia Musicae, etc. led to the establishment of the first museum of musical instruments in Japan. Like this, Sahei Mizuno introduced the Japanese music culture to overseas, devoted his life to its promotion, and produced the cornerstone for the establishment of museums for musical instruments in Japan.

1. はじめに

音を出す目的で作られた道具である「楽器」を収集するという行為は、既に紀元前から見られるが、その目的はもっぱら楽器を使用するためであり、時には美術工芸品として鑑賞するためであった。しかし、19世紀のヨーロッパ各国では、大陸貿易の商品と共に、世界各地から様々な楽器が集結したことから、楽器のみを集めて分類展示し、楽器文化を人々に紹介する楽器博物館が誕生することになった。この楽器博物館は、わが国にも普及し、現在は大学附属や公立の楽器博物館が各地で開館している。

ところで、わが国においても楽器の収集は江戸時代以前から様々な所で行われていたが、その目的は、やはり演奏や美術品鑑賞のためであった。しかし、楽器のみに焦点を当て、様々な楽器を収集し、それ

らを一堂に集めて公開することを思いついた人物は、わが国では兵庫県伊丹市に在住し、箏（琴）製作を本業とした水野佐平（1891～1972）が最初であったと指摘できる¹。水野は、太平洋戦争時代から歴史的な箏や三味線、笙といったわが国の伝統楽器や、中国などの大陸の楽器を収集し、終戦後、それらを集

¹当時の東京藝術大学教授中能島欣一は、水野が昭和32（1957）年に開館した楽器展示施設について、全国初の施設であったことを指摘している（水野佐平『自叙伝』第八章「忘れがたい作品」未発行 尚、『自叙伝』は未発行なためページ数は不明である）。当時の新聞記事も全国で初めての展示施設として紹介している（毎日新聞 朝刊 1957年 6月 26日 5面）。

めて独立した施設に展示し、一般に公開した。「丹水会館」と名づけられたこの施設は、わが国で最初に楽器のみを恒常的に展示公開したものであり、楽器博物館の祖形といえることができる。さらに、水野は大阪と東京の私立の音楽大学などに、自ら収集した楽器資料の大半を惜しみなく寄贈した。その結果、武蔵野音楽大学にわが国最初の楽器博物館が、続いて大阪音楽大学にも楽器博物館が設立された。また、彼はフランスやドイツ、オーストリアなどの外国の楽器博物館にも邦楽器を寄贈している。したがって水野佐平は、わが国における楽器収集と展示の先駆者であり、わが国に楽器博物館を誕生させる礎を築いた人物であると考えられる。また、邦楽文化を外国にも発信させる、いわば文化大使としての役割も担った人物でもある。

このように楽器文化の普及に功績の高い水野佐平であるが、彼に関する研究は、伊丹市の機関紙²と邦楽器専門誌³に簡単な紹介が見られるほか、水野佐平の生涯に関する記事をまとめた小冊子⁴が発行されている程度である。これらの研究はいずれも、箏製作者としての彼の人物像を中心に上げており、楽器収集者としての水野佐平に焦点を当て、楽器収集、展示による一般公開の理由、さらには自らの楽器コレクションを音楽大学などに寄贈した理由などに注目した先行研究は皆無という状況である。

この度、水野佐平の地元、伊丹市近郊を訪れ調査した結果、200頁に及ぶ未発行の『自叙伝』を平成21(2009)年3月30日に発見した。また、昭和26(1951)年から昭和46(1971)年の間に、日本や海外の新聞に掲載された、彼に関する記事なども収集した。したがって、本稿の目的は、これらの資料を

²森本啓一『伊丹風流 記念碑』財団法人 柿衛文庫 2007・森本啓一「箏製作家 水野佐平物語」『いたみティ vol.73』伊丹経済校友会 2007

³「邦楽と70年—“水野コレクション”水野佐平小伝」『なごみ3月号』淡交社 1992

⁴大阪音楽大学編『琴づくり一代 水野佐平翁』大阪音楽大学 1970

参考に彼の生涯をあらためて辿り、楽器収集と展示、寄贈の経緯をまとめることである。

本研究の課題は以下の三点である。第一に、水野佐平の詳細な生涯を概観し、とりわけ、彼の楽器収集家としての活動に注目する。第二に、彼が楽器収集を始め、独立した楽器展示施設を開設し一般公開した意図と経緯を明らかにする。第三に、彼が国内外に自身のコレクションを寄贈した経緯を辿り、彼の行動が、邦楽文化の発信と、わが国の楽器博物館の誕生に与えた影響を明らかにする。本研究は水野佐平の楽器収集と展示、そして楽器の寄贈という活動に焦点を当て、彼の業績を楽器文化の普及という視点から新たな評価を試みるものである。

2. 水野佐平の生涯

水野佐平は明治24(1891)年5月7日、徳島県勝浦郡棚野村字坂本(現在の勝浦町大字坂本)に農業を営む父、松浦菅蔵と母サトの次男、松浦佐吉として生まれた。兄の岡蔵は7歳年上である。水野佐平は幼少から音の出るおもちゃが好きで、自分で枝切れや竹の棹に糸を張って楽器を作り遊んだ。後に彼は「それをブンブン鳴らすと、えもいわれぬ音のひびきがわいて、ぞくぞくさせた」⁵と語っている。佐吉の将来に大きな影響を与えたのは、学んだ坂本尋常小学校の教諭の東條であった。東條は10歳での佐吉の尋常小学校卒業に当たり、音が好きな佐吉を、楽器作りの道に進むよう勧め、当時の棚野村村長の新居彦太郎に相談を持ちかけた。村長の計らいで佐吉は大阪府西区江戸堀北通二丁目にある「水野琴商」(店主水野松太郎)に徒弟奉公することになった。「水野琴商」は琴と三味線の製造販売を行っていた。佐吉は奉公の当日に、楽器店にある和楽器を触り、音の響きを聞き、「箏がよい」と決めたが、ここから水野佐平の箏製作者としての人生が始まる。

水野琴商での奉公は厳しい毎日であったが、佐吉は店主水野松太郎とともに、すでに「康春」の銘をもつ住み込みの職人、川村勝太郎のもとで箏製作を学んだ。また、13歳からは箏の演奏を松下岡乃勾当に習った。この演奏の習いは12年間に及ぶ。佐吉は

⁵前出 水野佐平『自叙伝』第一章「ふるさと」

大正 3 (1914) 年 3 月、23 歳で当時 18 歳の水野家の娘きくと結婚し、水野家に婿入りし、水野姓を名乗った。翌年の 5 月 27 日、長男善太郎が誕生したが、脳性小児麻痺で昭和 19 (1944) 年 4 月 29 日に世を去っている。水野は結婚後から特に箏製作に専念し、桐の良材を求めて北陸にまで足を運んだ。大正 11 (1922) 年、31 歳の水野は大阪で老舗の三味線製造、石村政之助とともに大阪三越百貨店に邦楽器部を設置した。しかし昭和 6 (1931) 年に経済恐慌が起こり、水野琴商の経営は困窮した。当時、水野琴商は宝塚歌劇と取引があったが、その関係者から宝塚付近なら取引を続けてもよいとの話があり、水野琴商は昭和 6 (1931) 年 3 月 31 日、大阪から伊丹市宮之前に転居した。義父母、妻、病弱な長男、大正 10 (1921) 年 12 月 6 日生まれの長女道子との 6 人家族での引越しであった。この場所は現在の「水野楽器店」の所在地である。引越しの直後、義父松太郎は昭和 7 (1932) 年 4 月 19 日に 71 歳で、その後義母は昭和 20 (1945) 年に 77 歳で他界している。

昭和 20 (1945) 年、終戦直後に水野は伊丹市伊丹字宮ノ下に転居した。そしてこの地で水野は邦楽文化の普及に専念する。まず、猪名神社東側の閑静な屋敷の一隅に昭和 25 (1950) 年 9 月、音楽研究所をかねた演奏所を建設し、「丹水会館」と名づけた。こけら落としにはわが国を代表する邦楽作曲家であり箏演奏家、宮城道雄 (1894~1956) が演奏を披露している。宮城道雄はその後事故で亡くなるが、水野は宮城道雄の一周忌を迎えた昭和 32 (1957) 年 6 月 25 日、故人を偲び邦楽の普及を決意して、所蔵してきた古代名作箏などの邦楽器をはじめ約 80 点を、この「丹水会館」に展示し公開を開始した。

水野はこのコレクションを、個人の所有物とは考えず、邦楽を代表する日本の文化財と考えた。そして、これ等の楽器を外国や国内の音楽大学に寄贈し、邦楽文化の啓蒙と普及に役立てることを決意した。まず昭和 38 (1963) 年にフランスに箏を寄贈した。さらに昭和 41 (1966) 年に大阪音楽大学にコレクションを寄贈し、続いて昭和 42 (1967) 年に武蔵野音楽大学に、さらに相愛学園大学にもコレクションを寄贈した。また、フランスに続き、昭和 42 (1967) 年にはドイツとオーストリアに自作の箏を 2 点寄贈

している。

水野はこれ等の功績を評価され、昭和 43 (1968) 年に勲六等単光旭日章を授章した。そして昭和 47 (1972) 年に 81 歳でその生涯を閉じた。

3. 楽器収集の開始と展示施設の開設

3.1 楽器収集の開始

水野が楽器収集を始めたのは、太平洋戦争で大陸に慰問に訪れた時点から始まる。慰問の前の昭和 14 (1939) 年 2 月、水野は日本軍特務機関より、中支軍慰問所の楽器修理作業の依頼を受け、第四師団篠山連隊に配属になり、約 2 ヶ月間北・中支各地で蓄音機や楽器の修理を担当した。その際に許可を得て南京で支店を開いたところ、兵隊に尺八が月に 1000 本も売れている。その後一時帰国し、同じ昭和 14 (1939) 年 10 月、邦楽慰問団を依頼され、尺八、箏の演奏者ら 4 人で上海、蘇州、南京、九江、徐州など中支方面を約 1 ヶ月間訪問した。この時のメンバーは、尺八が大阪市の大藪秀嶺 (当時 45 歳)、箏が伊丹市の菊井松音検校 (当時 33 歳)、そして菊地が盲人であるための付き添いとして菊地の夫人幸子 (当時 30 歳)、そして水野佐平 (当時 48 歳) の 4 名である。水野は慰問の傍ら、中国各地で古楽器を収集した。収集した楽器は特務機関より特別の上産品として証明を取得し、日本に持ち帰ることができた。一行は同年 11 月に帰国し、伊丹市公会堂で報告演奏会を行っている。

戦時中は、それらの集めた楽器を空襲から守るために疎開させなければならなかった。水野は、倉庫などの建物は空襲の対象になると考え、あえて山中や畑の中の小屋に楽器を疎開させている。終戦後、三味線などの修理が急に増え、楽器修理の仕事が繁盛し始めたが、その仕事の傍らで水野は着実にコレクションを増やしていった。戦前、箏を通じて知り合った地主や会社の社長らが、家宝を売って金に換えたり、食料と交換するようになり、水野に所有の箏を売りに来たり、買い手を探してほしいと言って来た。特に昭和 22 (1947) 年 3 月、金融緊急措置令により第一、第二封鎖預金が設置されて、いわゆる新円生活が始まると、彼らの窮迫した動きが激しくなった。そこで、このままでは貴重な楽器が散逸し

てしまうと、水野はできる限りそれらを引き取ることにした。

自叙伝には次のような記載がある。「昭和 21 年、今の『藤田美術館』で知られる藤田伝三郎男爵邸に、弦楽器がぎょうさんあって、わたくしは藤田さんを直接には存じあげなかったのですが、辰馬西宮市長の奥さんが、わたくしをひどくごひい気で、『私が一緒にいったげる』と申して頂きました。今の『太閤園』の一番大広間、七、八十畳から百畳はある部屋に、楽器がズラリと並んで、まさに壮観でしたが、そのなかに、有名な筑紫箏など十一面におよぶ名器があったのです。そして、辰馬夫人のお口添えで、すっかり頂くことになり、ただし、『水野さんに選択はまかせるから、一面だけは残しておいてくれ』との条件でしたので、わたくしは良心的に、いちばん換えがたい立派なものを残させてもらいました。ところが、これらの名器のたぐいの取引が、驚いたことに、すっかり信用づくのです。いくらで買え、といわれるのではなく、ただ包み金をさし出して、『これらの品物を頂きます』という、それだけなのです。その包みの金の額は、さすがに、あまり失礼な、法外なものであってはならないことはもちろんですけれども、このような名器を入手させてくれるものは、やはり『人間』であり、その人間の信用なのだ、と自らに強くいいかけました」⁶ここには、水野が名器を手にした経緯が具体的に記載されている。そして、このように水野は取引での真摯な態度を常に忘れないことで、徐々に信用を得ていった。

では、なぜ箏製作者である水野が、邦楽器や中国などの外国楽器の収集を始めたのであろうか。収集を始めた動機について、水野の『自叙伝』の中に「わたくしは、古来の箏の名作品を多数発掘し、保存して、これについてつぶさに研究し、あるいは権威者の助言を聞いて、箏づくりの参考にしてまいりました」⁷とある。このように水野は箏製作者として、名作から、その製作技術を学ぶために箏を集めた。これが当初の楽器収集の動機であった。そして、この箏製作のための研究は、さらに他の楽器へも広がっ

た。『自叙伝』には「戦時中、箏づくりの仕事がほとんどなくなると、わたくしは次々に洋楽器を買い求めました。チェロ、ビオラ、コントラバス、ピアノ、フルート、ヴァイオリンなどありとあらゆる洋楽器を、自分で演奏しては分解し、音の神秘をさぐっていったのです」⁸とある。

専門である箏製作の研究のために内外の楽器収集を始めた水野は、やがてコレクションそのものに興味を持っていく。当時の新聞記事に「(箏の) 名作の秘密を探ろうという思い立ち、最初はずぎつぎと琴を分解していった。そのためにいろいろ琴を集めているうちに、いつの間にかコレクションそのものに興味を持ってしまった」⁹と掲載されている。そして水野は集めた楽器を後世に伝えることが重要であると認識していった。『自叙伝』には「印度、支那大陸をはじめ、内外で苦心蒐集いたしました古代の箏や笛類を、戦時中、疎開するのにもひと苦労でした。

(中略) よし盗まれることがあったとしても、誰かによって、いつかは活用される、爆撃の目標になって、消失してしまうことこそ、文化財の最大の浪費だからです」¹⁰とある。水野はこの時に、今まで収集してきた楽器が、箏製作の研究材料だけでなく、「文化財」として、後世に伝えるべき価値のあるものであることを認識していたのである。

3.2 楽器展示施設「丹水開館」の開設

終戦後、世の中が落ち着いてくると一般の家庭の主婦らが箏を習い始めた。水野は、戦争で荒れた人々の心を癒すとともに、音楽を普及することを目的に、猪名神社東側の閑静な屋敷の一隅に、昭和 25 (1950) 年 9 月、音楽研究所をかねた演奏所を建設し、「丹水会館」と名づけた。この施設の 9 月末に開室した音楽教室では、ギター、ヴァイオリン、ハーモニカをはじめ、箏、三味線、尺八など、邦楽、洋楽の各種が指導された。また、毎週二回の講習会には、30 数名の若い男女が参加した。水野はこれを「念願の『し

⁶前出 水野佐平『自叙伝』第十章「箏と人生」

⁷前出 水野佐平『自叙伝』第八章「忘れがたい作品」

⁸前出 水野佐平『自叙伝』第八章「忘れがたい作品」

⁹読売新聞 朝刊 1963 年 6 月 24 日 阪神版

¹⁰前出 水野佐平『自叙伝』第八章「忘れがたい作品」

つけ教育』を徐々に実現している」¹¹と評価している。

箏製作を専門とする水野が、家庭の音楽教育の普及のために教室を開いたのは、音楽に携わるものとして、終戦直後の人々に音楽の良さを伝えることが必要であると考えたからである。「丹水会館」での教室の開室について、『自叙伝』には「二十年前から、音楽で人びとの『和』を結びたいと発願し、ことに戦後荒んだ人心をよみがえらせた切ない願いが、この『音楽殿堂』に顕現したのです」¹²とある。水野はこの「丹水会館」を音楽普及の施設として様々な活用したいと願い、音楽会や時には児童音楽コンクールなども開きたいと望んでいた。また、ここで邦楽器のみならず、様々な洋楽器も指導されたのには、戦時中に水野が箏の研究のためにヴァイオリンなど多くの洋楽器を集めていたことも影響していると考えられる。

「丹水会館」は当時の工事費百余万円の費用で、広さ百五十平方メートル、楽器の冴えた音色をそのまま味わえるように苦心の設計の元に、金具は一切使わず、屋根は三重の杉皮で覆われた。このことを、尼崎市水堂に住む関西三曲家協会主事である藤田斗南が知り、京阪神の話題として、東京都に在住の宮城道雄に伝えた。宮城道雄は「伊丹市へはぜひお伺いいたしたく、その節はよろしく」と藤田に返事を託した。そして昭和26(1951)年春に宮城道雄の関西演奏旅行の合間に、特別演奏会が実現した。これが「丹水会館」のこけら落としである。

この特別演奏会では、宮城道雄は4月7日夜、弟子の牧瀬喜代子、牧瀬一枝と共に伊丹を訪れ、水野宅に一泊し、翌8日は丹水会館で午後1時と午後5時半の二回にわたって、一般公開の演奏を行った。さらに9日午後には近郊の招待客のみの特別演奏会を開き、10日に帰京した。演奏会では生田流の菊井松音大検校との合奏も織り込まれた。会館の収容人員は約500人であったが、連日満席になり、NHKはこのこけら落としを「県民の時間」の番組で紹介し

た。

その後、昭和31(1956)年に宮城道雄が事故で亡くなるという訃報があった。宮城道雄の一周忌を迎えた昭和32(1957)年6月25日、水野は邦楽再興に努めた宮城道雄の死を無駄にはならないと考え、所蔵していた名作箏などの邦楽器類を、自宅の「和楽荘」と邸内の「丹水会館」に展示した。特に「丹水会館」にはコレクションの重要な作品が並べられ、ここには水野が40年がかりで収集した重要文化財指定の康光作、菊岡太助作三作を含む、名作箏約40面と、名作三味線などの邦楽器類と、中国の月琴や七弦琴さらに巻物など約80点が展示された。この「丹水会館」での邦楽器の展示について、当時の東京芸大教授中能島欣一は「水野さんは邦楽の楽器屋さんとしては、珍しいほど進歩的で熱心な人だ。邦楽のよい楽器は、これまで、正倉院、芸大といったところに、バラバラに保存されているだけなので、まとまった陳列館をつくらうという試みがでたのは、たいへん結構だ。一ヶ所におさめられるのも、全国ではじめてだ」¹³と述べている。まさにわが国で最初の楽器陳列館の開館であった。

水野が苦心して集めた楽器を展示し公開した理由には、まず、それらの楽器に対する純粋な愛情があった。水野は当初集めた楽器を分解し、構造を見ることで箏作りの参考にしていた。しかし、楽器を集めることに興味移ると、水野には集められた楽器を身内のように愛する感情がわいてきた。『自叙伝』には「古楽器を手に取り、頬ずりして、毎日、布でみがきこんで手入れするのが、わたくしの無上の楽しみ」¹⁴とある。そして、その愛する楽器の持つ歴史的・美術的な価値をなるべく多くの人々と分かち合いたいという思いがわきあがった。『自叙伝』には、武者小路実篤が、正倉院の琵琶について「それにふさわしかった世界があったとすれば一事実あったのである—それは驚くべきことである」と語った言葉を引用し、「わたくしが、『丹水会館』を中心に、古代の邦楽器の粋を、あまねく公開しようとした意図も、純粋にわきあがってくる、身うちのこ

¹¹前出 水野佐平『自叙伝』第八章「忘れがたい作品」

¹²前出 水野佐平『自叙伝』第八章「忘れがたい作品」

¹³前出 水野佐平『自叙伝』第八章「忘れがたい作品」

¹⁴前出 水野佐平『自叙伝』第八章「忘れがたい作品」

の『驚き』を、内外にできる限りおびたしい人びとに分ちたい熱願にほかなりませんでした¹⁵とある。このように、水野は楽器の持つ文化財としての価値に開眼し、それを他の人々と共有するためにコレクションを公開したのである。

4. 邦楽器の寄贈

4.1 フランスへの箏の寄贈

昭和 32 (1957) 年からの「丹水会館」での楽器の展示後、水野は箏などの邦楽器の国内外への寄贈を始める。最初は昭和 36 (1961) 年のフランスの国立パリ音楽院附属楽器博物館 (National de musique musée de instrument) への箏の寄贈であった。昭和 36 (1961) 年 5 月、パリ市立セルヌスキ博物館 (Musée de Cernuschi) の副館長ルネイヴオン・ルフェーブ・ダルジャンセが、カンボジアにあるフランス国立極東学院 (l'École française d'Extrême-Orient) 研究員の資格で来日中、たまたま水野宅を訪れた。ダルジャンセは、そこで水野が戦前中国大陸からインドまで足を伸ばして集めた箏、笛、太鼓など百数十点の東洋楽器コレクションを見て驚き、中でも邦楽器の名器である太助の箏に興味を示した。そこで水野はこの箏の寄贈を申し出たところ、ダルジャンセは正式な公の受贈手続きを取ることを望み、神戸領事館にジャン・ミードモール総領事、イブ・コファン副領事を訪れて相談し、くわしい箏の経歴書、写真とともに、東洋音楽学会会長、田辺尚雄の鑑定書を揃えてフランス政府の博物館審議会に取り次いだ。2度の審議の結果、昭和 36 (1961) 年 12 月 7 日、フランス政府から神戸領事館に「寄贈を受ける」との公電が届き、12 月 29 日に水野宅にその知らせが届いた。そして 3~4 月頃、パリの日本大使館で行われる予定のフランス政府への贈呈式の招待の便りも、領事館からもたらされた。こうして太助の箏は昭和 37 (1962) 年 1 月 4 日に、神戸よりフランス郵船ラオス丸でフランスに運ばれていった。

しかしこの贈呈式は延期されている。それは、水野が昭和 37 (1962) 年 5 月 25 日に外務省を訪れ、一人の演奏者を自己負担で同行させたいと申し出た

ところ、「フランス政府から、その同行者に対する招待の書類が無いと渡航は認められない」と断られたからである。当時、為替管理法の関係で外貨割当が難しいという事情があった。この件は朝日新聞にも掲載され¹⁶、その事務的な対応が非難され、伊丹市長も仲介に入る事態になったが、結局この時点での渡欧は実現されなかった。

その後の昭和 38 (1963) 年春、為替管理が徐々に緩和されてきたことにより、ようやく水野と演奏者の訪仏の可能性が見えてきた。水野は大阪のフランス友好協会へ相談し、その斡旋もあり、箏演奏者柴田貴美子と共に、フランス渡航の許可が下りた。昭和 38 (1963) 年 6 月 25 日の出発の数日前に神戸オリエンタルホテルで壮行パーティが開かれ、ミードモール副領事長より祝辞が述べられている。

水野と柴田の二名は、昭和 38 (1963) 年 6 月 26 日にパリに到着し、翌日の 27 日、国立パリ音楽院附属楽器博物館でパリ高等音楽院 (Conservatoire national supérieur de musique et de danse) 院長ルーシュール及びシャーピール国立パリ音楽院附属楽器博物館館長の臨席のもと、簡素な受贈式が行われた。式典の後、贈呈の二代目太助の箏を柴田貴美子が「六段」や宮城道雄の「潮音」を演奏した。しかし、水野はこの演奏だけでは満足しなかった。彼は、この機会に邦楽をなるべく多くの欧州人に知ってもらいたいと考え、贈呈式の後、公の席での演奏の機会を依頼した。これが萩原徹在フランス大使を通してルーシュール高等音楽院院長に伝えられ、パリの日本館 (Maison du Japon) で 7 月 17 日に演奏会が決まった。当日はルーシュールパリ高等音楽院院長、シャーピール国立パリ音楽院附属楽器博物館館長、各国の専門家、放送新聞関係者ら多数が訪れた。

水野らの 20 日間の在欧は、結局 55 日間に及び、フランスのほかイタリア、スイス、イギリスなども訪れた。帰国後、東南アジアの古典音楽を記録する目的でアジアに訪問中のシャーピール国立パリ音楽院附属楽器博物館館長が水野邸を訪れ、お礼の挨拶をしている。

¹⁶朝日新聞 朝刊 1962 年 6 月 1 日 12 面

¹⁵前出 水野佐平『自叙伝』第八章「忘れがたい作品」

4.2 大学へのコレクションの寄贈

水野は、国立パリ音楽院附属楽器博物館への箏の寄贈の後、丹水会館に展示されていた邦楽器やアジアの楽器類をわが国の東西の音楽大学にまとめたコレクションとして寄贈する。まず昭和41（1966）年11月に大阪音楽大学に、続いて昭和42（1967）年10月に武蔵野音楽大学にコレクションを寄贈し、さらに相愛学園大学にも寄贈した。これらの寄贈に当たって、水野は自身のコレクションの中から、すでに重要文化財の指定を受けている初代太助の箏、鎌倉時代の頼尊作とされる笙、江戸時代の名工石村近江作の三味線など最も重要なものばかりを選んでいく。もともと水野は、苦勞し、私財を投じて集めたコレクションを私蔵する意図はなかった。彼は「カネで買えないもの、貴重な文化的財宝を、いたずらに私蔵しないで、きれいに寄贈することもまた、わたくしの幾十年來の、信念の吐露でございます」¹⁷と述べている。

水野はまず活動の拠点である伊丹市に近い大阪にある大阪音楽大学に、昭和41（1966）年11月、邦楽器64点を寄贈した。内訳は、初代太助作の箏（江戸時代）、康光作の箏（江戸時代）などを含む箏が19点、石村近江作の三味線（江戸時代）を含む三味線が14点、琵琶が4点、胡弓が3点、笙が1点、一弦琴1点、二弦琴2点、三弦琴1点、小鼓3点、大鼓3点、大太鼓1点、鉦鼓1点、鞆鼓2点、箏篋1点、竜笛2点、法螺貝1点、鐘類5点である。

続いて昭和42（1967）年10月、水野は東京の武蔵野音楽大学にコレクションを57点寄贈した。内訳は、初代太助作の箏（江戸時代）、康光作の箏（江戸時代）などを含む箏が28点、石村近江作の三味線（江戸時代）を含む三味線が15点、琵琶が2点、胡弓2点、笙1点、一弦琴1点、二弦琴2点、尺八3点、小鼓1点、十七弦箏1点、七弦琴1点である。このように、水野は大阪と東京の私立の音楽大学に箏と三味線を中心に様々な邦楽器を寄贈した。なぜ二つの音楽大学を選んだのかは不明だが、わが国の東西の音楽大学を公平に選んだのではないかと考えられ、それは両者の寄贈内容の多くが似ていることから

¹⁷前出 水野佐平『自叙伝』第十章「箏と人生」

裏づけられる。また、昭和42（1967）年には相愛学園大学にも邦楽器コレクションを寄贈している。

この大学への寄贈の理由について水野には、まず、当時のわが国の大学の展示施設に、邦楽器の展示が欠けていることへの不満があった。武蔵野音楽大学楽器博物館は、そのパンフレットに、昭和41（1966）年に大学を訪れた水野佐平から、楽器陳列室に邦楽器の不足を指摘されたこと、そして、翌年に水野佐平からコレクションの寄贈を契機に楽器博物館を開館したと記している¹⁸。さらに水野は、コレクションの寄贈により、大学に楽器博物館が開設されることを望んでいたと思われる。最初の大阪音楽大学への寄贈について水野は、「故永井幸次初代学長とも固いお約束をいたし、楽器博物館の誕生と同時に、本格的な価値高い展示物を贈進いたしました」¹⁹と述べている。武蔵野音楽大学においても、当時の学長、福井直弘が水野佐平に宛てた自筆の手紙には、「楽器博物館の建設については、目下いろいろ経費の研究をしています。具体化にふみ切れるときには、勿論貴下にまずご報告いたします」²⁰とある。これらの記録から、水野が両大学の楽器博物館開設の準備に関わっていたこと、コレクションの寄贈と楽器博物館の開設とが関連付けられていたことがわかる。

ではなぜ一般の博物館ではなく、大学という教育機関に邦楽器展示施設の開設を望んだのであろうか、水野には日本の音楽大学の教育が、欧米の音楽一辺倒に片寄っていることへの抵抗感があり、音楽大学に邦楽教育を普及させたいという望みがあった。水野は「欧米の新知識を吸収するのもよろしいが、まず、日本の良さを知ることが大切ではないかと思えます。日本人であれば、当然のことだと思のです。わが国の音楽学校に、邦楽科がないのは何としてもおかしい、とわたくしはたいぶん掛けあったことがありました。その方面についても、多少ともお手伝いできたことをよろこんでおります」²¹と述べてい

¹⁸『武蔵野音楽大学楽器博物館』武蔵野音楽大学 1967 p.1

¹⁹前出 水野佐平『自叙伝』第十章「箏と人生」

²⁰福井直弘から水野佐平への手紙（手紙に年月は記されていないが、内容から当時のものと推定される）

²¹前出 水野佐平『自叙伝』第十章「箏と人生」

る。

水野は大学への寄贈により、邦楽に対する大学の教育研究が高まるとともに、大学博物館のような施設により、コレクションが学内のみならず学外の見学者にも公開され、多くの人々に邦楽文化の素晴らしさが啓蒙されることを望んでいた。『自叙伝』には、コレクション寄贈後の大阪音楽大学附属楽器博物館での展示について「学生諸君はもとより、内外貴賓の参観者の目をそば立たせています。(中略) 音楽文化研究所も、得難い珠玉の文化資料として、縦横な研究対象に供されているのをみれば、実に頼もしく感じるのをごさいます」²²とあり、寄贈された楽器が大学で希望通りに活用されていることに満足している。

このように水野が大学にコレクションを寄贈したのは、わが国の大学に楽器博物館のような施設を開設させ、邦楽器を展示させることで、邦楽文化の啓蒙と普及を図るとともに、箏などの邦楽教育を大学に定着させるためであった。

4.3 ドイツ、オーストリアへの箏の寄贈

最初に水野が箏をフランスに寄贈したのは、偶然パリ市立セルヌスキ博物館の副館長ダルジャンセが「丹水会館」を訪れたためであった。そして水野は個人で箏の寄贈を実現させた。次に水野が箏を欧州に寄贈するのは、水野が自らのコレクションを寄贈した武蔵野音楽大学の関係者の仲介による。

昭和 41 (1966) 年、当時の西ドイツとオーストリアの両駐日大使から、福井直弘 (1912~1981) 武蔵野音楽大学学長を通じて「本国の博物館に日本の箏が無く、探している」旨の要望が伝えられた。水野は「ヨーロッパの人たちが日本の楽器を見直してくれば」とこの申し出を受け、昭和 42 (1967) 年、水野佐平作の箏 2 点が両大使館に寄贈された²³。この 2 点の箏は、おのおのドイツの「ベルリン楽器博物館 (Musikinstrumentenmuseum Berlin)」とオーストリアの「ウィーン民族博物館 (Wiener Völkerkundemuseum)」に納められることが決まり、

²²前出 水野佐平『自叙伝』第十章「箏と人生」

²³サンケイ新聞 朝刊 1968 年 6 月 29 日 16 面

その贈呈式が昭和 43 (1968) 年にベルリンとウィーンで行われた。この時には箏演奏者 2 名、宮内庁雅楽部から簫 (しょう) と尺八、地歌三味線の各 1 名を加えて、水野と福井学長の 7 名が参加している。7 月 11 日にベルリン楽器博物館の講堂でアルフレッド・ベルナー (Alfred Berner) 館長の参加で贈呈式が行われ、この楽器は楽器博物館の第 5012 号の登録になった²⁴。ウィーンの民族博物館での贈呈式では、7 月 15 日、ベッカードナー (Etta Becker-Donner) 民族博物館長から挨拶があり、現地の日本音楽研究者の教授の説明ののち、水野から館長に箏が手渡され、その後演奏会行われた²⁵。また、水野はロンドンの博物館にも箏を寄贈している。

水野が外国の博物館に楽器を寄贈した理由は、わが国の邦楽文化の良さを海外に伝えたいという意図からであった。特に、水野が箏のみを海外に贈っていることからわかるように、邦楽文化の中でも、専門である箏の良さを伝えることが寄贈の目的であった。水野は「日本のすぐれた伝統楽器である箏を、よりひろく世界に紹介したい」²⁶と述べている。また、水野は「箏は、洋楽器とたいへんよく同調しますので、海外各国への輸出も有望でしょう」²⁷と述べており、さらに「各国の人たちに、日本音楽、日本楽器の真の P・R をして、輸出の足がかりにもしよう一との意図がなかったわけではございません」²⁸とも述べているが、これらの言葉からは、箏の生産を拡大させたいという製作者としての商業的な意図もあったことがわかる。

この箏という楽器が、海外の楽器に充分引けをとらない楽器であることを水野に教えたのが宮城道雄であった。『自叙伝』には「日本の箏が、世界でもすぐれた楽器であることも、宮城さんから身にしみて訓えられました」²⁹とある。水野は、宮城道雄により専門である箏の価値の高さに開眼し、自信を持ってその良さを海外にも伝えたいと思ったのである。

²⁴ベルナーから福井直弘への手紙 1968 年 7 月 22 日
²⁵“Die Press” 1968 年 7 月 16 日 Seite 5

²⁶前出 水野佐平『自叙伝』第十章「箏と人生」

²⁷前出 水野佐平『自叙伝』第十章「箏と人生」

²⁸前出 水野佐平『自叙伝』「序章」

²⁹前出 水野佐平『自叙伝』第十章「箏と人生」

宮城道雄の一周忌に水野はコレクションを初めて公開したが、宮城道雄は水野の信念と活動に多大な影響を与えた人物であった。

5. 水野佐平の功績

5.1 邦楽文化の普及と発信

水野佐平はその生涯を邦楽の普及にささげた。昭和 25 (1950) 年 9 月に建設した「丹水会館」では、ギター、ヴァイオリン、ハーモニカはじめ、箏、三味線、尺八など、邦楽、洋楽の各種が指導された。毎週二回の講習会には、30 数名の若い男女が参加している。また、伊丹市教育委員会主催で古典楽器教養講座が開かれ、市内の小・中学校長ら多くが見学を訪れ、箏、三味線、胡弓などを見学した。また、婦人会、青年団など各種団体の指導者を含めた講習会も行われ、多くの見学者でにぎわった。遠方からは水野の故郷である徳島からも、教育者団体などが訪れている。水野はこの研究所を「社会教育、社会事業のつもりで、特に家庭音楽に力をいたす方針でありました」³⁰と述べているが、この丹水会館が地域の音楽教育に果たした功績は大きい。特に邦楽の教育機関としては、関西を代表する施設であり、それは何度も宮城道雄が訪れていることからわかる。水野は、関西における邦楽を中心とする音楽普及の社会教育に尽力した人物であると言える。

また、欧州への箏の寄贈は、それまで日本の楽器に触れたことの無い現地の人々に邦楽を伝えることに貢献した。特にフランスでの演奏会は、かつて宮城道雄でさえ現地を訪問しながら実現できなかった、パリ市内の公の場での箏の演奏会であり、集まった聴衆から多くの反響があった。

5.2 楽器博物館の誕生

水野佐平の邦楽の寄贈を受け、東西の音楽大学が楽器博物館を開設した。武蔵野音楽大学は、昭和 35 (1960) 年から学内に「楽器陳列室」を開設していたが、昭和 42 (1967) 年 10 月に、水野からの邦楽コレクションの受贈を契機に、この施設を「武蔵野音楽大学楽器博物館」として改組し開館した。

この楽器博物館はわが国最初の楽器博物館である。この開館式は水野からの受贈記念式典をかねたもので、当日は近衛秀麿指揮の大学管弦楽団の演奏による箏の協奏曲が披露され、他にも様々な邦楽の演奏が大学のホールで行われた。

大阪音楽大学は、昭和 41 (1966) 年の水野からの邦楽コレクションの受贈を契機に、昭和 42 (1967) 年 4 月に学内に楽器資料室を開設した。そして翌年の昭和 43 (1968) 年に「大阪音楽大学附属楽器博物館」と改称した。さらに平成 14 (2002) 年からは「大阪音楽大学音楽博物館」として開館している。

このように、水野の邦楽の音楽大学への寄贈は、わが国に楽器博物館を誕生させ、それが他の音楽大学と一般の博物館に普及するきっかけを作った。国立音楽大学は、昭和 41 (1966) 年から楽器収集をはじめ、昭和 51 (1976) 年に楽器研究の音楽研究所を開設し、その後昭和 63 (1988) 年より「国立音楽大学楽器学資料館」を開館している。上野学園は、昭和 50 (1975) 年より楽器収集をはじめ、古楽器研究を開始した。さらに平成 19 (2007) 年に校舎の新築に伴い楽器展示室を開設し、一般に公開を始めている。また東京藝術大学では、音楽学者故小泉文夫 (1927~1983) の収集した音楽資料を中心とする、「小泉文夫記念資料室」を昭和 60 (1985) 年より開設し、ここには多くの楽器資料が展示されている。そして楽器博物館の開館は、音楽大学からさらに広がり、昭和 49 (1974) 年には「民音音楽資料館」が開館し、この資料館は平成 16 (2004) 年に「民音音楽博物館」と改称されている。さらに平成 7 (1995) 年には公立の楽器博物館ではわが国初の「浜松市立楽器博物館」が開館した。

5.3 大学教育への影響

水野佐平の働きにより、大学教育にも邦楽の授業が導入されるなどの影響があった。

大阪音楽大学では、昭和 42 (1967) 年度より、当時の短期大学第 1.2 部の音楽専攻に箏を教科に取り入れた。大阪音楽大学は、以前から邦楽科の開設を計画しており、それは創立目的の一つでもあった³¹。

³⁰前出 水野佐平『自叙伝』第八章「忘れがたい作品」

³¹大阪音楽大学八十年史編集室編『大阪音楽大学八

さらに昭和 53 (1978) 年より大学専攻科に箏専攻を導入した。当時大阪には人間国宝に指定された菊原初子 (1899~2001) がおり、この菊原の存在が大阪音楽大学の邦楽科新設には大きな影響を与えていた。しかし、『大阪音楽大学八十年史』でも述べられているように、水野の昭和 41 (1966) 年のコレクションの寄贈は、まさに「時宜を得ていた」行為であった³²。

大阪音楽大学と同様に水野より邦楽器のコレクションを受贈した武蔵野音楽大学は、昭和 51 (1976) 年より生田流、山田流の授業を開始した。これは両派の指導者による箏の少人数式レッスンで、専科でこそないが、週に 1 度講師から直接レッスンを受ける本格的な箏の指導であった。これは現在も続き、このレッスンは楽器博物館内の教室で行われている。

水野は大学へのコレクションの寄贈の目的について、邦楽器の展示した楽器博物館の開設のためであるとともに、西洋音楽教育に偏るわが国の音楽大学に、邦楽の授業を取り入れる契機にすることをあげているが、両音楽大学の例からも、その意思は着実に音楽大学に伝わっていると考えられる。

6. おわりに

以上、水野佐平の生涯とその功績をまとめた。水野佐平は、箏の製作を本業にするとともに、箏をはじめとする邦楽器やわが国近隣諸国の楽器を収集し、それらをまとめて展示公開した。さらにこのコレクションの大半を大阪音楽大学、武蔵野音楽大学などの大学に寄贈し、邦楽の普及に努めた。この寄贈をきっかけに武蔵野音楽大学に、わが国で最初の楽器博物館が誕生した。そして国内だけでなく、パリ、ドイツ、オーストリア、ロンドンといった欧州の楽器博物館に箏を寄贈し、邦楽文化の海外への発信に努めた。彼の功績は、わが国において邦楽を広く普及させることに大きく寄与したこととともに、わが国で最初に楽器陳列館を公開し、その資料を寄贈する

ことで、わが国に楽器博物館が生まれる契機を作ったこと、さらに、邦楽器文化を国内だけでなく、広く海外にも発信したところにある。

水野は苦心して集めた楽器を、惜しみなく国内の音楽大学に寄贈した。その後の「丹水会館」には、歴史的な楽器はほとんど無く、水野自身の製作の箏が数点残っただけだという。まさに全てをなげうって邦楽の啓蒙に尽くしたのが水野佐平であった。彼は自叙伝の中で、「わたくしの執念というか、ほんとうの精神目標は、たとえば、戦争の最中でも、月明の晩を狙うて、一生懸命に疎開を急いだことによって、もろもろの古楽器類を保全することができた、その実証にもとづいて、必ずわが国の楽器、とくに箏を諸外国に認めさせ、箏楽器の優秀性を国際的に顕示するんだ、ということにあります」³³と述べている。常に箏を中心とする邦楽器への愛情が、水野を動かしていた。水野佐平は、私財を投じて生涯を邦楽の普及にささげた人物であり、わが国に楽器博物館が誕生する礎を築いた人物である。

(Received: September 30, 2009)

(Issued in internet Edition: November 1, 2009)

十年史—楽のまなびや—』 大阪音楽大学 1996 p.231

³²前出 大阪音楽大学八十年史編集室編 『大阪音楽大学八十年史』 1996 p.237

³³前出 水野佐平『自叙伝』第十章「箏と人生」